

89. <平成時代20年>

冒頭から私事で恐縮ですが、先日、J S 勤続 20 年の表彰を理事長より頂戴しました。私が J S に入社したのは、今の天皇が即位された平成元年の 4 月のことですが、当時、オキシデーションディッチ (OD) 法を採用する処理場は 50 に満たない数でした。その後の 10 年、J S では数度にわたる設計指針や標準図等の改訂を行い、10 年後には OD 法を採用する処理場の数は 500 を超えました。更にその次の 10 年、高度処理 OD 法の調査研究の成果を踏まえ、第 3 次の技術評価とそれに伴う標準設計の改訂が行われ、20 年を経た現在では、全国の下水処理場のおよそ半分に当たる 1,000 ヶ所近くにまで至っています。

また、私が入社してちょうど 10 年目の平成 10 年から第 1 次の膜分離活性汚泥法 (MBR) の共同研究が開始されました。それから 10 年、技術評価の実施や設計要領の制定、第 2 次・第 3 次の共同研究を経て、現在では 10 ヶ所の MBR が稼動しています。そして、近年、既存施設の再構築による高度処理化や下水処理水再利用等の切り札として、MBR への関心と期待が非常に高まっています。

このように私が下水道に関わらせて頂くようになった平成時代の 20 年を振り返ると、およそ 10 年を節目として OD 法、MBR と、次の 10 年、20 年のコアとなる技術が開発・実用化されてきたことがわかります。

地方財政の疲弊や膨大なストックの改築更新等、下水道事業を取り巻く情勢はますます厳しくなる一方で、温室効果ガス削減による低炭素社会の構築や、資源・エネルギーの再生・創生による循環型社会の形成等、下水道は新たな役割への貢献も求められています。平成時代、そして私自身も 20 年目の節目を向かえ、10 年後、20 年後にあの時代はいったい何をしていたのだと言われぬように、今何をどのように取り組めばよいか、取り組むべきか、悶々と悩む日が続いています。

<総括主任研究員 橋本敏一>

※ J S 技術開発情報メール No. 97 号 (2009/12/8) に掲載